

**[A年] 受難節第1主日(2025年3月9日)****【旧約聖書日課】申命記 30章15～20節**

15見よ、わたしは今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く。16わたしが今日命じるとおり、あなたの神、主を愛し、その道に従って歩み、その戒めと掟と法を守るならば、あなたは命を得、かつ増える。あなたの神、主は、あなたが入って行って得る土地で、あなたを祝福される。17もしあなたが心変わりして聞き従わず、惑わされて他の神々にひれ伏し仕えるならば、18わたしは今日、あなたたちに宣言する。あなたたちは必ず滅びる。ヨルダン川を渡り、入って行って得る土地で、長く生きることはない。19わたしは今日、天と地をあなたたちに対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るようにし、20あなたの神、主を愛し、御声を聞き、主につき従いなさい。それが、まさしくあなたの命であり、あなたは長く生きて、主があなたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた土地に住むことができる。

**【使徒書日課】ヤコブの手紙 1章12～18節**

12試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格者と認められ、神を愛する人々に約束された命の冠をいただくからです。13誘惑に遭うとき、だれも、「神に誘惑されている」と言ってはなりません。神は、悪の誘惑を受けるような方ではなく、また、御自分でも人を誘惑したりなさらないからです。14むしろ、人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて、誘惑に陥るのです。15そして、欲望ははらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。

16わたしの愛する兄弟たち、思い違いをしてはいけません。17良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父から来るのです。御父には、移り変わりも、天体の動きにつれて生ずる陰もありません。18御父は、御心のままに、真理の言葉によってわたしたちを生んでくださいました。それは、わたしたちを、いわば造られたものの初穂となさるためです。

**【福音書日課】マタイによる福音書 4章1～11節**

1さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた。2そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。3すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」4イエスはお答えになった。

「『人はパンだけで生きるものではない。

神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」5次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、6言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。

『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』

と書いてある。」7イエスは、

「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。8更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、9「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。10すると、イエスは言われた。「退け、サタン。

『あなたの神である主を拝み、

ただ主に仕えよ』

と書いてある。」11そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 申命記 30章15～20節

15見よ、私は今日、あなたの前に命と幸い、死と災いを置く。16私が今日命じているとおり、あなたの神、主を愛し、その道を歩み、その戒めと掟と法を守なさい。そうすればあなたは生きて、その数は増える。あなたの神、主は、あなたが入って所有する地であなたを祝福される。17しかし、もしあなたが心変わりして聞き従わず、惑わされ、他の神々にひれ伏し、仕えるならば、18私は今日、あなたがたに宣言する。あなたがたは必ず滅びる。ヨルダン川を渡り、入って行って所有する土地で長く生きることができない。19私は今日、天と地をあなたがたに対する証人として呼び出し、命と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたは命を選びなさい。そうすれば、あなたもあなたの子孫も生きる。20あなたの神、主を愛し、その声を聞いて、主に付き従いなさい。主こそあなたの命であり、主があなたの父祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた土地であなたは長く生きることができ。

## ヤコブの手紙 1章12～18節

12試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格な者とされ、神を愛する者に約束された命の冠を受けるからです。13誘惑に遭うとき、誰も「神から誘惑されている」と言ってはなりません。神は、悪の誘惑を受けるような方ではなく、ご自分でも人を誘惑したりなさらないからです。14人はそれぞれ、自分の欲望に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。15そして、欲望がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。16私の愛するきょうだいたち、思い違いをしておはなりません。17あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から、光の源である御父から下って来るのです。御父には、変化も天体の回転による陰もありません。18御父は、御心のままに、真理の言葉によって私たちが生んでくださいました。それは、私たちを、いわば造られたものの初穂とするためです。

## マタイによる福音書 4章1～11節

1さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、霊に導かれて荒れ野に行かれた。2そして四十日四十夜、断食した後、空腹を覚えられた。3すると、試みる者が近づいて来てイエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」4イエスはお答えになった。

「『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる』と書いてある。」

5次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の端に立たせて、6言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。」

『神があなたのために天使たちに命じると彼らはあなたを両手で支え

あなたの足が石に打ち当たらないようにする』と書いてある。」7イエスは言われた。「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある。」

8さらに、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその栄華を見せて、9言った。「もし、ひれ伏して私を拝むなら、これを全部与えよう」と10すると、イエスは言われた。「退け、サタン。」

『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』

と書いてある。」11そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが近づいて来て、イエスに仕えた。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・3月9日「受難節第1主日」の日課主題は「荒れ野の誘惑」。

・旧約聖書日課は、「申命記」から、いわゆる「モアブ契約」に含まれる契約句箇所。使徒書日課は、ヤコブの手紙から、試練・誘惑に耐えることを教える箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、「荒野の誘惑」の説話箇所。

**旧約日課(申命記 30章より)**

・「申命記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法」の第五巻。「出エジプト記」から始まり、「レビ記」、「民数記」と展開される「モーセ物語」の最終章を構成し、モーセがエジプトから40年間導いてきたイスラエルの民を前に、これまでの歩みを振り返りながら、「シナイ山」で授与された「律法」の意義を再確認し、また解き直すという建付けで編纂され、加えて後継者ヨシュアの任命と遺言、モーセの死を物語る説話が末尾に置かれている。このような「申命記」の全体構成の中に、「シナイ山」における「律法」授与を伴う「契約」(通例「シナイ契約」と呼ばれる)とは別に結ばれたとされるもう一つの「契約」として付加されているのが日課箇所を含む29~30章で、その設定句(28:69)から通例「モアブ契約」と呼ばれている。

・「モアブ契約」は、その呼び名のとおり「モアブの地で…結ばせた契約の言葉」(28:69)とされる。「モアブの地」は、「申命記」冒頭で設定されている地でもあり(1:5)、それを踏まえれば、ここに「モアブの地」で告げられた言葉があること自体は自然なことである。ところが、28:69の説明句は、この自然な文脈を敢えて阻害し、ここに異質の章句を挿入しようとしているかのような説明を為している。「申命記」には同様に自然な文脈を敢えて阻害しているかのような説明句の置かれた箇所がある(4:44~45など)。これらのことは、「申命記」がそもそも複数の「契約伝承説話」を複合的に再編成したものである可能性を示唆している。このような不可解が残るにもかかわらず、それらを整合させる修正編集が為されずに構成された「申命記」は、そもそもの建付けとして「シナイ契約の再録」という構成を軸としており、この理解に基づけば、「モアブ契約」も、「原契約」としての「シナイ契約」の更新・再契約という位置づけで置かれているとみなすことができる。

・「モアブ契約」を含む「申命記」の設定は、エジプトを出てから40年後、すなわち第一世代が第二世代に入れ替わったことを前提としている。「シナイ契約」が第一世代に対して結ばれた契約であり、「申命記」全体もこれの再確認であるのに対して、「モアブ契約」は初めから第二世代に対してのものである。「イスラエル」を「シナイ契約」に基づく「契約共同体」と位置づける本書は、「モアブ契約」をもって、共同体の世代継承を「契約更新」という形式で担保しようとしている。

**使徒書日課(ヤコブ1章より)**

・「ヤコブの手紙」は、新約「使徒書」の中で、「ペトロの手紙」(一、二)、「ヨハネの手紙」(一~三)、「ユダの手紙」などと共に「公同書簡」という括りで扱われてきた。冒頭に著者として記される「神と主イエス・キリストの僕であるヤコブ」は、通説では、「パウロ書簡」が「主の兄弟」(ガラ1:19)として示唆し、また教会で「柱と目されるおもだった人たち」(同2:9)として名を挙げている「ヤコブ」であると解されてきた。主イエスに「ヤコブ」という弟がいたことは福音書も伝えており(マタイ13:55、マルコ6:3)、「使徒言行録」は、このヤコブが主イエス昇天後の教会の最初のメンバー120人に含まれていたであろうこと(使1:14)、また「使徒ヤコブ(ヨハネの兄弟)」の死後のエルサレム教会で事実上代表者となっていたことを示唆している(使21:18)。また、聖書外史料でも、1世紀のユダヤ人歴史家フラヴィウス・ヨセフスが、エルサレムの「キリスト信者」らの指導者を「義人ヤコブ」として伝えている。おそらく、初期のエルサレム教会は、使徒と呼ばれるようになった十二弟子が徐々に各地に散り、拠点を移して教会共同体を形成するようになっていった一方で、「主の兄弟ヤコブ」を中心とするガリラヤ以来の主イエスの親族を中心とする初期メンバーが残って存続し、各地の使徒らの教会にとっては、実質的な指導性よりも「母教会」としての象徴的な位置づけのみが意義を保ち続けていくことになったと考えられる。

・本書は、宗教改革者マルティン・ルターが「藁の書簡」と揶揄したように、宗教改革者が重んじた「パウロ書簡」の思想に相反するとみなされるような言説が見られる。たとえば、「人は行いによって義とされるのであって、信仰だけによるものではありません」(ヤコブ2:24)という言説は、パウロの「人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考える」(ロマ3:28)という主張と真っ向から対立するようにみなされてきた。しかし、「パウロ書簡」がこのような主張を展開する中で問題としている「律法」は、ユダヤ人の慣習である「割礼」などを問題視する文脈の中でのことであり、他方では「キリストの律法」(1コリ9:21、ガラ6:2)という新しい規範に基づいて行動することを強く説いている。「ヤコブの手紙」が、「離散している十二部族の人たち」(1:1)に宛てた書簡であるという建付けであるにもかかわらず、「割礼」や「食事規定」などユダヤ人の慣習として最も重視されていた事柄について触れることなく、むしろ「山上の説教」や「パウロ書簡」で強調される「愛の実践を伴う信仰」(ガラ5:6)を重視していることを踏まえれば、本書が「パウロ書簡」などと対立する思想に基づいていると推断するのは早計である。

・12節「試練(ペイラスモス)」は、本書冒頭1:2でも取り上げられているように、本書の主要テーマ。13~14節で「誘惑に遭う」などと訳されている語は、この語の動詞形「ペイラゾー」。

## 福音書日課(マタイ4章より)

・日課箇所は、主イエスが洗礼を受けられた後に荒野で40日の断食をして過ごされた際に受けたとされる「荒野の誘惑」の説話箇所。共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝え、特に「ルカ」はほぼ同じ内容の「悪魔」による誘惑を伝えている(ルカ4:1~13)。ただし、「マタイ」と「ルカ」では、「悪魔の誘惑」の展開順が異なるほか、末尾の扱いも異なる。他方「マルコ」は、「悪魔の誘惑」の具体的な展開を伝えず、簡略なまとめ句で終えている。

・「誘惑」をもたらす者について、「マルコ」は「サタン(サタナース)」としているが、「マタイ」と「ルカ」は「悪魔(ディアボロス)」と置き換え、ただ「マタイ」は一箇所のみ「サタン」の語を用いている。「マタイ」や「ルカ」は他の箇所では「悪魔」と共に「サタン」の用語を用いている一方、「マルコ」は「サタン」の用例はあるが「悪魔」の用例はない。「サタン」は、旧約(ヘブライ語聖書)で「サタン」や「妨げる者」と訳される「サターナ」の音訳である。ギリシア語旧約聖書(七十人訳)では、「ヨブ記」などの「サターナ」が「悪魔(ディアボロス)」と訳されている例が見られる。旧約の「サタン」は、広義に「神の御使い」である。他方、「悪魔」と訳されるギリシア語「ディアボロス」の原義は「向こうへ投げる者」で、一般に「中傷する者」の意で用いられる。「マルコ」は、「誘惑する者」を「神の御使い」と見る旧約の視点(唯一神を中心とする一元論的世界観)を保っているが、「マタイ」と「ルカ」は、神と対立する一群の存在を想定した東方宗教的な視点(善悪二神の対立する二陣営的世界観)を持ち込んでいるのかもしれない。

・「悪魔」との対話の中で主イエスが引用するのは、いずれも「申命記」の聖句。4節←申8:3、7節←申6:16、10節←申6:13。他方、「悪魔」が引用するのは「詩編」(6節←詩91:11~12)。「申命記」的な「神の言葉の神学」が背景にあると推認される。「マタイ」では、「受難物語」(21~27章)を除くと「詩編」の引用はほとんど見られない(日課箇所の他は13:35のみ)。「マルコ」も同様。「ルカ」では他にも「詩編」の引用がある。

## 来週の誕生日(3月9日~15日)

## 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-294「ひとよ、汝が罪の」(= II 99番)は、16世紀宗教改革期のドイツの音楽家ハイデンがルターの説教に影響されて作った詞で、原詞は22節で構成された受難物語を歌う詞だが、近年の讃美歌集には1節と最終節が採用されてきた。曲は、同時期の音楽家グライターの作で、1525年発行の詩編歌集に詩編36編のための曲として作曲。グライターのは、一時期プロテスタント教会に属し牧師職にも就いたが、後年カトリックに回帰した。
- ・21-284「荒れ野の中で」は、受難節の讃美歌として英米の讃美歌集で広く採用されている。作詞は19

世紀インド生まれの聖職者スミタンとなっているが、大幅に改作された詞が広く用いられている。

- ・21-530「主よ、こころみ」(= I 316)は、18世紀にモラヴィア派伝道者の家庭に生まれ、新聞編集者として活動しながら讃美歌創作を続けた英国人作家 J・モンゴメリーの最も人気のある讃美歌の一つ。曲は、米国ニューヨークで楽器店を営みながら教会オルガニスト・聖歌隊長として各地の教会で活躍したレインの作で、この歌詞をタ礼拝で歌うために作曲したとされる。
- ・21-314「神の国の命の木よ」は、17世紀ハンガリーの改革派牧師 I.P.キラーが作詞した受難節の讃美歌。曲は、18世紀に出版された改革派讃美歌集で付された作曲者不詳の旋律。

## 21-294「ひとよ、汝が罪の」

## O Mensch, bewein dein Sünde gross

1. O Mensch, bewein dein Sünde groß, / darum Christus seins Vaters Schoß / äußert' und kam auf Erden; / von einer Jungfrau rein und zart / für uns er hier geboren ward, / er wollt der Mittler werden. / Den Toten er das Leben gab / und tat dabei all Krankheit ab, / bis sich die Zeit herdrange, / dass er für uns geopfert würd, / trüg unsrer Sünden schwere Bürd / wohl an dem Kreuze lange.
2. So lasst uns nun ihm dankbar sein, / dass er für uns litt solche Pein, / nach seinem Willen leben. / Auch lasst uns sein der Sünde feind, / weil uns Gotts Wort so helle scheint, / Tag, Nacht danach tun streben, / die Lieb erzeigen jedermann, / die Christus hat an uns getan / mit seinem Leiden, Sterben. / O Menschenkind, betracht das recht, / wie Gottes Zorn die Sünde schlägt, / tu dich davor bewahren!

## 21-284「荒れ野の中で」

## Forty days and forty nights

1. Forty days and forty nights / you were fasting in the wild; / forty days and forty nights / tempted, and yet undefiled.
2. Shall not we your sorrow share / and from worldly joys abstain, / fasting with unceasing prayer, / strong with you to suffer pain?
3. Then if Satan on us press, / flesh or spirit to assail, / victor in the wilderness, / grant that we not faint nor fail!
4. So shall we have peace divine: / holier gladness ours shall be; / round us, too, shall angels shine, / such as served you faithfully.
5. Keep, O keep us, Savior dear, / ever constant by your side, / that with you we may appear / at the eternal Eastertide.

## 21-530「主よ、こころみ」

## In The Hour of Trial

1. In the hour of trial, / Jesus, plead for me / Lest by base denial / I unworthy be. / When you see me waver, / With a look recall, / Nor for fear or favor / Ever let me fall.
2. With forbidden pleasures / Should this vain world charm / Or its tempting treasures / Spread to work me harm, / Bring to my remembrance / Sad Gethsemane / Or, in darker semblance, / Cross-crowned Calvary.
3. Should your mercy send me / Sorrow, toil, and woe, / Or should pain attend me / On my path below, / Grant that I may never / Fail your cross to view; / Grant that I may ever / Cast my care on you.
4. When my life is ending, / Though in grief or pain, / When my body changes / Back to dust again, / On your truth relying, / Through that mortal strife, / Jesus, take me, dying, / To eternal life.